

さつたおうじ ほんしょうたん  
薩陀皇子の本生譚について

昭和四十八（一九七三）年六月二十日 探仙公民館

南無妙法蓮華經

私は当地探仙に参りますまで、およそ一ヶ月婆根巴町に住んでおりました。婆根巴の東南約六哩をへだてて南無仏陀山という山があります。去る六月二日、この山に詣りました。この山の在る處を往昔、般遮羅國と申しました。釈迦牟尼世尊が一時大衆の御弟子を將て、この国に巡錫せられました。釈迦牟尼世尊は大勢の御弟子の前において、御手をもつて大地を押されました。大地が裂けて七宝莊嚴の宝塔が湧きました。釈尊は阿難尊者をして、その七宝塔の扉を開かしめ、その中より七宝莊嚴の函を取り出させられました。釈尊はこの函の中より、一つの舍利を取り出して、大衆に礼拝せしめ、みずからもまた、この舍利を礼拝あそばされました。かくて釈尊の本生譚が説かれました。

- 56 -

乃往過去にこの国に大王があつて、その名を大車といひ、三人の皇子をつれて、ある日南無仏陀山に遊ばれました。三人の皇子は輿に乘じて山深く分け入り、大王を見失い、道に迷うて物騒な恐ろしい藪の中に入りました。一人は藪を分けて出ましたが、第三皇子が一人残りました。是を薩陀王子と申します。

しかるに、やがて瘦せ衰えたる虎が、五頭の児虎を伴われて来ました。虎は飢え疲れて、児に乳を与えることもできなくなつておりました。これを見て、薩陀王子は我身を飢えたる虎に与うる決心をして、喜んでその身命を捨てました。その薩陀王子の遺骨を祀つたものが、即ちこの舎利である。この遺骨の菩薩の修行をした、その御恩にちなんで、「我れ疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得た」と説かれ、その御仏舎利様を御釈迦様が礼拝なされました。

- 57 -

現代文明の思想的基礎をなすものは進化論であります。進化論は優勝劣敗、弱肉強食の法則を認めます。十九世紀には歐羅巴諸国がアジア、アフリカ、アメリカ、オーストラリア等を征服し、現在北米が越南（ベトナム）戦争を行ふがごときは皆、この強肉強食の法則を迷信せるがためであります。進化論によれば、薩陀王子の本生譚にあらわれた「虎の

前に一人の子供が現われた』といふのは完全な弱肉強食の一事件に過ぎませぬ。物質文明は人生觀を唯物史觀として、食物争奪を人間の歴史のことく考えました。

人はまず食わざるべからず。食わんがためには生産せざるべからず。生産する者を労働者といふ。働く者は食うべからず。ここにおいて人間の生涯は食わんがために生産し、生産せんがために食うといふことに過ぎなくなります。そこには道徳的、精神的の進歩は少しも問題とされておりませぬ。現代人類の悲劇は皆、ここにおいて起つてゐます。薩陀王子と虎の物語に照らして、共産主義を検討しますれば、食わざるべからずといふ大命題のもとに生活する者は、虎にして薩陀王子ではありませぬ。かくのことき共産主義を仏教の本生譚から批判すれば、なお虎、即ち猛獸の法則を信じておる者と言わなければなりません。

世界の苦しみを救うためには、虎の法則『食わざるべからず』といふことをやめて、薩陀皇子の法則『我が身を捨てて人のため奉仕する』といふ宗教的な人生觀に帰らねばなりません。

(『天鼓』昭和四十八(一九七三)年八月号八十頁)

\* 本生譚 || 御釈迦様が前世で修めた菩薩行を集めた説話。

## 誕生会之辭

昭和四十八(一九七三)年八月六日

### 南無妙法蓮華經

大恩教主釈迦尼世尊降誕の國涅槃國の中において、涅槃國民衆の間にあつて、本日私は八十九歳の誕生会を開く因縁となつてことを深く感謝いたします。

去年十二月国王に見参して、釈尊降誕の聖地嵐毘尼復興計画の一端として御仏舍利塔並びに仏殿僧房建築の件を陳情し、さらに文書をもつて提出いたしました。これによつて、今年一月二十五日に嵐毘尼付近に宝土を得て、宝塔地鎮祭を挙行し、引き続いて首都加德滿都に宝土を求めて、仏殿僧房を建立し、この仏殿の開堂供養とともに、私の誕生会を開く予定にて着々準備を進めました。

嵐毘尼の聖地復興莊嚴の清淨なる功德を積みながら、ここにおいて我が誕生会を迎